

3) 多発胃悪性リンパ腫とⅡc型早期胃癌が併存した1例

登坂 尚志 (巻町国保病院
内科)
白井 良夫 (燕労災病院
外科)
鈴木 力 (新潟大学
第一外科)

症例は68才の女、約4ヶ月間出没する胃のもたれと心窩部痛あり。近医で胃内視鏡検査を受け、生検で悪性リンパ腫と診断され、当院に紹介された。術前の再検で、前庭部～胃角の後壁と胃角の小弯のⅡa+Ⅱc様の悪性リンパ腫の病変以外に、体上部後壁にⅡc様病変を認め、内視鏡所見より早期胃癌を疑い、胃全摘術を施行した。病理組織学的には前庭部と胃角の後壁の病変も連続性がなく、3ヶ所の多発胃悪性リンパ腫で diffuse large cell type、胃角後壁の病変は pm、他の2病変は sm であった。体上部後壁の病変は低分化型腺癌で、一部印環細胞癌を混じ、深達度は sm、この病変の肛門側の一部から大弯にかけて、異型リンパ球細胞の浸潤が粘膜固有層内に認められた。

4) 当院において経験した乳頭部癌の2例

坂井洋一郎・山川 良一 (新潟潟医協下越病院)
安達 哲夫・羽賀 正人 (内科)
五十嵐 修・斉藤 俊一 (同 外科)
時光 昭二
樋口 正身 (同 病理)

当院で経験した乳頭部癌の2例についてその臨床所見、十二指腸内視鏡所見、ERCP 所見、手術標本を中心に若干の文献的考察を加えて報告した。症例1は47才の男性で主訴は黄疸であった。十二指腸乳頭部の内視鏡所見では乳頭部の腫大と不整形のびらんを認めた。ERP 所見では膵管の拡張を認めた。手術標本では大きさ10×10mm で Oddi 筋内にとどまり Stage 1 であった。症例2は63才の女性で、主訴は発熱と黄疸であった。十二指腸乳頭部の内視鏡所見では乳頭部の腫大と片側性のびらんを認めた。手術標本では大きさは10×8mm で一部十二指腸筋層に浸潤があり Stage 2 とした。十二指腸乳頭部癌の診断において十二指腸内視鏡検査及び膵胆管造影は有用であった。

5) 黄疸を来す前に超音波検査にて診断しえた小膵頭部癌の1例

中平 啓子・村山 裕一 (村上病院
外科)
山寺 陽一・清水 春夫 (新潟大学
第一病理)
黒崎 功

症例は上腹部不快感を主訴として来院した66歳の女性で、入院時発熱、黄疸なく、血液検査で軽度の肝機能異常を認め、血清総ビリルビン 0.5mg/dl、血清アミラーゼ 214単位と正常であった。腹部超音波検査で胆管の拡張とこれに接した直径 21mm の腫瘤像を認め膵頭部癌と診断した。膵管の拡張は認めなかった。CT では腫瘤像を指摘しえなかった。ERP では主膵管の断裂を、また腹腔動脈造影では前上膵十二指腸動脈の分枝に encasement と同部位に径約 1.5cm の無血管域を認めた。切除可能な膵頭部癌と診断し、膵頭十二指腸切除術を行なった。切除標本では膵内胆管に接して20×17×10mm の腫瘤を認め、T1, s0, ch2, rpe, stage Ⅲの小膵癌であり、絶対治療切除であった。膵癌の早期発見に於ける超音波検査の有用性について改めて認識させられた。

6) Ⅱb型早期胆嚢癌の病理形態学的検討

羽賀 正人・渡辺 英伸 (新潟大学
第一病理学教室)
黒崎 功・鬼島 宏
味噌 洋一
白井 良夫・内田 克之 (同 第一外科)

今回、我々はⅡb型早期胆嚢癌の病理形態学的特徴及び肉眼的鑑別診断について検討した。対象は過去7年間に当教室で検索された微少癌を除くⅡb型早期胆嚢癌20症例20病変(全早期癌の29%)。Ⅱbの定義は癌巣の粘膜全体が周囲の非癌粘膜とほぼ同じ高さを示しているものとした。診断率は術前画像診断 0/20、術後新鮮材料 2/20 (10%)、固定材料12/20 (60%)であった。固定材料で病変の指摘が可能であったのは微細～粗大顆粒状10例、微細乳頭状2例の粘膜像であった。異常を指摘できなかった8例は炎症あるいは自己融解等で全例表層上皮が脱落傾向にあった。よって表層上皮が保たれていれば、高分化腺癌に特徴的な粘膜像が存在しており、肉眼診断及びPTCCS 等による画像診断の可能性が示された。

7) 腹腔鏡検査で肝左葉萎縮性癭痕肝と思われる1例

早川 晃史・山本 賢 (田代消化器科病院)
斉藤 建吉・田代 成元
渡辺 俊明 (新潟大学第三内科)

症例は59才の男性、昭和63年2月末より心窩部痛と嘔気あり、3月16日当院初診。胃角部活動性潰瘍と GOT、